

Yellowstone Wildlife Trails

25/Aug. ~ 05/Sep. 2019



コース：ソルトレークシティ（ユタ州） → ジャックソン/グランド・テトン国立公園（NP）
（ワイオミング州） → イエローストーンNP（ワイオミング州） → グレッシュャー
NP（モンタナ州） → コー・ダーリン（アイダホ州） → シアトル（ワシントン州）

木村 喜代志

も く じ

グランド・テトン国立公園 (Grand Teton National Park)

イエローストーン国立公園 (Yellowstone National Park)

氷河国立公園 (Glacier National Park)

ツアー中の自炊と外食

グランド・テトン国立公園 (Grand Teton National Park)

グランド・テトンのキャンプ地は、ジャクソン市街の手前、スネーク川沿いであった。ジャクソン入りした日の午後、オプションツアーでスネーク川のラフティングとジャクソン市内観光に分かれた。ラフティング班は早々に準備をして出かけて行った。市内観光班はイギリス人4名と日本人の5名であった。

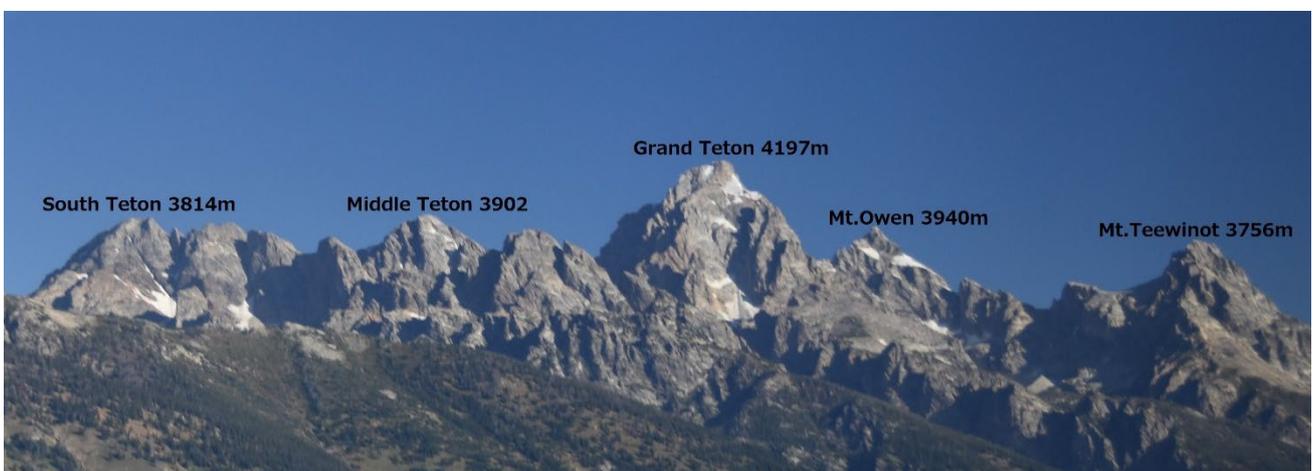
グランド・テトン国立公園の玄関口にあたるのがジャクソンである。周囲が急斜面の山々に囲まれ、標高 2,000mの高原町であった。年間降水量が 300~400 mmというから「豊芦原の瑞穂の国」とは対極に近い乾燥地帯である。緯度が 43 度で札幌とほぼ同じで、日差しは肌を刺すが、日蔭は爽やかであった。街の中心、タウンスクエアの4隅のゲートはエルクの角のアーチで飾られ、市のシンボルになっていた。

歴史を見ると、120 年程前に毛皮狩猟人が住みつき、牧畜が主な産業となったのが 1890 年頃だという。ジャクソンのあるワイオミング州の面積は日本の 70%ほどで、人口は 50 万人、牛や馬、羊などの家畜が人口を何倍も上回ることから Cowboy State と揶揄されるという。また、西部開拓期の男女比は圧倒的に男が多かったことから女性が長年大事にされてきたこともあり、男女平等の考えが浸透し Equality State、男女平等州の別称もあると聞いた。

ジャクソンの街を歩いている開拓期の風情が感じられる。街そのものが荒野の中に突如現れた感じだし、建物の殆どが丸太などの木造で、メインストリートの歩道は板張りだった。行き交う人々の多くがカーボーイハット姿で、街の雰囲気になじんでいた。そんな時、メインストリートに観光用の駅馬車が現れ、西部劇の舞台のような街の中をゆったりと通り過ぎて行った。

日没後にキャンプサイトに戻ったが、ほぼ同時にラフティング班も戻ってきた。日没と同時に気温は急激に下がる。そのうえ濡れた衣服で小刻みに震えていた。

2 日目、ジャクソンを通り過ぎグランド・テトン国立公園に向かった。ジャクソンを過ぎて間もなく左手にごつごつとした岩山が姿を現した。そして、見覚えのある山の姿に変わり、草原を見下ろすように聳えていた。1953 年公開の西部劇「Shane」(シェーン)の背景に映っていた美しい山々の姿であった。



およそ 160 年前、アメリカ 16 代大統領リンカーンの時、西部の未開発土地を無償で払い下げるとい法律が施行され、辺境の地に多くの開拓農民が押し寄せてきた。そこで繰り広げられたのが牧場主と開拓農民との土地争いであった。これを題材にした小説の映画版がシェーンであった。

西部劇には先住民族への偏見、汗の滲んだ男臭さ、殴り合いなどが頻繁に出てくる。どうもアメリカの西部には男らしさ美德とする風潮が存在する。シェーンでもこのようなシーンが数多く見られたが、ワイオミングの壮大な自然美と、心に響く旋律の「遙かなる山の呼び声」(The call of the far away hills) が、見る人の心の奥深くから包み込み複数回見ても見ごたえのある映画であった。

牧場主が雇った黒尽くめのガンファイターと開拓農民宅に居候する流れ者シェーンの決闘後、ロッキーの岩山に向かって静かに去って行く後ろ姿に、少年、ジョーイの「シェーンカムバック!!」の声を跳ね返していたロッキーの岩山が、66 年前と変わりなく聳え、草原が無限に広がり、風雪で白くなった丸太造りの小屋が建っていた。

ジェニー・レークビジターセンターで車を降りた。この付近には 300 km ものハイキングコースが整備されているという。その中から湖を左回りに半周しヒドンフォールを眺め、カスケードキャニオンをたどるコースを選択した。ビューポイントで湖を見下ろし、アメリカ松の間から氷河の懸かる 4,000m を越すグランド・テトン山を眺めながらの楽しいコースだった。帰路はジェニーレークのシャトルボートでビジターセンターに戻り、キャンプサイトに戻った。

イエローストーン国立公園 (Yellowstone National Park)

先の「グランド・テトン国立公園」が、アメリカの数ある国立公園の中で最も美しい公園の一つとされているが、ここイエローストーンは「アメリカで最も偉大なアイデア」と呼ばれる国立公園である。ワイオミング州、モンタナ州、アイダホ州にまたがる公園で、四国の半分ほどの広さで、1872 年世界初の国立公園となった。

先住民族以外の人間が、この地に足を踏み入れたのは 1800 年後半とされている。見たこともない大自然の現象に心を動かされ、「この霊域はすべての人類、すべての生物に自由と幸福を与えるために神が創造されたもので、決して私有物にしたり、少数の利益のために



開発すべきものではない」として、国立公園とすることを政府に提言したことが、世界で初めての国立公園に結び付いたという。

この広大な公園は、200の間欠泉、10,000以上の温泉が湧く世界屈指の熱水現象集中地域で、火山国日本も遠く及ばないスケールである。また、森林、草原地帯はクマ、ムース、オオカミやバイソンなど希少動物の聖域でもある。

イエローストーン1日目は、午後のOld Faithful Geyserから始まった。100年以上の間80分毎に、1分半から5分にわたって熱水を40~60mの高さまで吹き上げることからfaithful = 忠実な の名称が付いたという。このエリアは「アッパー・ガイザー・ベズン」、上部間欠泉集中地域と呼ばれ多くの間欠泉や、Morning Glory (アサガオ) Poolをはじめいろいろな形の温泉プールが分布していた。しかも黄、緑、青、茶、白などなどの色で縁取られていた。間欠泉や温水プールの形状や周辺部の凹凸や襞をカメラに収めているうちに火山特有の派手な色彩を意識している自分に気付いた。そしてこれらの色は温泉に生息するバクテリアによることを知ったが素直に信じられなかった。90分の自由時間を目いっぱい写真撮影に費やした。キャンプサイトはオールド・フェースフルから北に移動したMadison、標高2,100mで2泊する。

2日目は、イエローストーン・グランド・キャニオンに向かう。公園の中央部をイエローストーン川が流れている。火山が噴出した硫黄や熱でもろくなった岩や溶岩が長い年月をかけて浸食されて形成された峡谷である。その規模は長さ32km、深さ240~360m、幅は450~1,200mに及び。コロラド川が刻んだグランドキャニオンの規模にはもちろん及ばないし、見ているだけで気が遠くなる水平地層も見られない。ここは、浸食から取り残された岩峰があり、滑るように河床に向かう急斜面の黄色を中心としてオレンジ、ピンク、白の彩が特徴だった。また、周囲に茂るアメリカマツは世帯交代を済ませた感じで、ひと際高い

枯れ木の下に若緑の若木が頭を揃えていた。川に沿って特徴的な名称のビューポイントが幾つか設けられ、トレールによって結ばれ、解りやすく整備されていた。



「イエローストーン」の名称は、先住民族がいう黄色い石のある川に由来するという。この峡谷及び周辺で見られる黄色い石は、火山活動に伴う硫黄による黄色と単純に考えていたが、熱水作用により黄色に変色した鉄分の色も含まれていることを知った。

3日目、昨夜、就寝時から雷が長時間続いた。雷鳴はテントで寝ていて背中でも感じられ、

雷光はテントの外張り、内張を通した。大雨を覚悟したが、テントの外張りを濡らすだけで済んだ。6:00、起床と同時に濡れたテントを撤収し6:30に、公園北側のマンモス・ホ

ット・スプリングスに向け移動した。朝食は車中でクラッカー・ビスケット類、チーズ・ハムに果物で済ませた。

マンモス・ホット・スプリングスビジターセンターで地学のスペシャリスト、バーバラ女史が待ってくれていた。今日の午前中は公園を地学の見地から説明、講義を受ける。アッパーテラスの上部まで車で上がり、更に少し南に移動して公園への門のように立ち塞がるゴールデンゲートで、さらに南に進んで柱状節理のシープイエタークリフなどを回ってからアッパーテラスに戻ってきた。流れ出る温泉水に含まれる石灰分が長い年月をかけて蓄積して、幾重にも重なりあったデコレーションケーキのお化けがドーンと腰を据えていた。思わずトルコのパムカレ、綿の城が脳裏に浮かんだ。規模や色などの違いはあるが、同じ要因によって形づくられたものだろう。確か、石灰岩に浸透してきた雨水が石灰、炭酸カルシュームを溶かし、地下水となる。これが温泉となって地上に流れ出し、温泉水に溶けた石灰が沈殿し棚田ように石灰華を幾重にも重ね、石灰華段となった。揺らぐ薄い湯煙が白と神秘さを強調し、茶や黒に変色しているのは石灰の酸化によるものだという。アッパーテラスを遠巻きし木々の間から石灰華段を眺める散策路を、講義を聴きながらゆっくりと通った。



オールド・フェースフルエリアで眺めた地球のという星とは異なるような色彩が地上を染めていたのは、エチオピアのダナキル沙漠のミニ版と言えるものだったし、ここの石灰華段はトルコのパムカレと肩を並べるものだった。アメリカは地球上の全てが混在している所に思えてきた。折角の地学の

説明も語学力不足で殆ど聞き取れなかったのが残念だった。

公園北口を出たところ、標高 1,650m のモンタナ州にテントを設営した。ここに 2 泊する。

午後、温泉に出向いた。駐車場の温泉入口の看板は、Boiling River だった。これまでの公園内の温泉は全て入湯どころか足を踏み入れることも危険で、禁止の立て札が建っていた。ここは日本人の言う温泉ではなく熱湯に近い湯が流れ込む川であった。みんな気持ちよさそうに川に浸っていた。とはいっても、川岸の丸太の柵以外、着替えどころかロッカーも何もない。入ってみての感想だが、河川水は冷た過ぎ、流れ込む温泉水は熱過ぎた。河川水の澱んだところに温泉水を取り入れ、自分好みの水温にするとところだったが、シャベルなどの道具を使って天然の湯舟でも造らない限り簡単に見つかるはずがない。熱過ぎ、冷た過ぎの中で、心と地元山形の吾妻山系に残る姥湯の露店風呂が脳裏を過った。吾妻山の奥の奥、絶壁

に囲まれた 1,250m にある温泉で、河原に窪地をつくり水と湯を取り入れる露風呂である。しかし、日本とこの地では風呂そのもの、温泉そのものの考え方に大きな相違があるから一緒に考えること自体に無理がある。

熱い、冷たい、滑ったなどの声が絶えない河原に突然エルクが現れた。角が生え始めた牡、大柄な雌と大きくなった子の 3 頭だ。足を濡らしながら岸辺の草を食べている。人を恐れる様子はなく、エルクの行く手の人間が路を開ける感じだった。

4 日目、今日は 5 時出発。朝食は車の中。夜明けの動物が動き始める時を狙っての早起きだ。野生動物ガイドと共に公園北口から東進し広々としたラマー谷を目指した。夜明けとともに霧が流れ谷間を埋める。霧の去った後の草原にプロングホーンの群れが現れた。ガイドが用意してくれた望遠鏡をセットし、動物を探す。ガイドが子連れクマを捉えてくれた。レンズ越しにその動きを追うのがやっとなのである。ハイロオオカミに続いてクロオオカミノ群れを捉えたが、動きは速い。クマとオオカミのニアミスもあったが、何事もなく離れた。ガイドの英語は、マシンガンそのものの速さで、たまに単語が解る程度で耳にするだけでストレスが募った。

バイソンは至る所で草を頬張り続け、首を上げることもなかったが、大群が車道を横切るときの迫りに圧倒され車の中で身を縮めてしまった。14 時テント場に帰る。夕食は街のピザ店で外食だ。18:30 までの自由時間をのんびり過ごす。



イエローストーンでの 4 日間を振り返ってみると、様々な自然の表情が浮かんでくる。定期的に熱水を吹き上げる間欠泉、思わず息をのみ込んでしまう鮮やかな色をした温泉、黄色い峡谷と豪快な滝、幾重にも重なった石灰華段などなど、行く先々で異なった景色に出会えた。そして、これらを造った地殻変動が、今も活発で地球の生命の息吹を肌で感じ取れた。また、望遠鏡で、目の前で見えた野生動物に一喜一憂したが、生息する種類からするとほんの一握りに過ぎず、公園全体像を捉えることができず、ただ漠然とスケールの大きさを感じたに過ぎなかった。

イエローストーンで見た景色は一目して火山地形である。しかし、高い山は見当たらない。山の部分が吹き飛ばされてしまい、山が無くなった火山であった。ビジターセンターで見た説明によると、山のあったところに巨大な穴が開き、そこでマグマが煮えたぎっているのだという。これが地球の核と繋がっているというのだから、まさに地球規模の火山と言える。従って、今も地震、地盤の隆起、陥没といった地殻変動が日常的に起こっているという。この地の巨大火山活動の周期は 60~70 万年前後で、それに近づいているという。もし、このような火山活動に見舞われれば、公園は完全に消滅し、火山から半径 1,000 km 以内の 90% は火山灰で窒息、地球の気温が最大で 10℃ さがり、5~10 年は続くという。イエローストーンは人類の存続も危ぶまれる危険をはらんだ世界遺産であることを知った。

日本を振り返ってみると、富士山の噴火、南海トラフ地震が心配されるし、地元山形でも吾妻、蔵王、鳥海山と 3 つの活火山を抱えている。火山は恩恵と危険が表裏一体であることを改めて認識した。

明日はカナダ国境に広がるグレッシャー国立公園まで 670 km、時間にして 7~8 時間のロングドライブだ。

氷河国立公園 (Glacier National Park)

国境をまたいだアメリカ側の Glacier National Park とカナダ側の Waterton Lakes National Park の 2 つの国立公園からなる。正式名称は Waterton - Glacier International Peace Park、ウォーターングレッシャー国際平和公園 と一つの名前になっている。

ロッキー山脈の真ん中で数千年の時間を費やして氷河が削った急峻な 3,000m 級の山々が連なり、その間に散らばった氷河湖、氷食谷、モレーン、氷河によって両側が浸食された急峻な尾根のアレードなど、氷河地形が折り重なって見られる文字通りの山岳氷河公園であった。

大陸分水嶺がローガン・パス (峠)、2,025m を中心にして公園内を南北に貫いていた。公園を東西に横断する、セントメアリー湖からマクドナル湖へ抜ける車道が Going to the Sun Road (GSR)、「太陽への道」と呼ばれていた。洒落た名称とされていたが、飾り気のないありのままの大自然が残っており Crown of the Continent Ecosystem、大陸生態系の頂点の名称ともども納得であった。しかし、19 世紀中頃に数えられた 150 の氷河は、2010 年までの残ったのは 25、2030 年間までには消滅の危機にあるという。公園内には 1,100 km にも及ぶハイキングコースが設けられているというし、日本では考えられないスケールであった。

1 日目は、イエローストーン北口のキャンプ場から 670 km、ロッキー山脈に沿ってモンタナ州縦断ドライブが、グレッシャー国立公園へのファーストステージであった。大きく、緩やかに波打つ大地が地平線の彼方まで広がる光景は圧巻であった。大半は牧草地と牧場で 100m もあろう長いスプリンクラーで色鮮やかな牧草を育て、牧場は牛も馬も飲み込まれてしまいそうな広さだった。思い出したように小麦とトウモロコシ畑が見えてくるとぽつんと家屋が現れるが人影は見えなかった。

しばらくして、この地の果てまで続く大地こそが、グレートプレーンズの西端であることに気付いた。そもそもモンタナ州は人口が少なく、面積が広い州で、農業が主産業である。当然人口密度が低くなるから自然が残っている。こんなことから「最後の最良の地」のニックネームの所以だという。他にも「大きな空の邦」、「宝の州」、「輝く山脈の地」とも称され、車のプレートにもなっていた。そして、モンタナの風景が、旅の醍醐味が移動そのものであることに気付かせてくれた。

遙か彼方に尖峰が見えてきた。あの山の裾がキャンプ地だろうか!! 17 時 30 分、セン

ト・メアリービジターセンター近くのキャンプサイトに着いた。9時間半の長いドライブが終わった。

2日目は、ガイドの車高の低い車に乗り換え、8時前に「太陽への路」、GSRをたどってローガン・パス(峠)に向かった。2,025mの峠は、特有の強風が通り抜け、アメリカとカナダの国旗が翻っていた。

ここからハイライン・トレールのハイキングが始まった。人気コースだけにハイカーが途絶えることはなかった。出だしから Garden Wall、岸壁を穿って造られたコースだった。このすぐ下をローガン・パスからループに向かう GSR が走っている。不注意に岩を落とせば車直撃となりかねない。全体的にみるとローガン・パスから北西に流れ出した氷河が削り取った氷食谷、U字谷の谷壁に造られた車道であり、トレールであった。逆に言えば、岸壁だからこそ工事を可能にしたともいえる。ここを過ぎるとなだらかな丘陵地が広がり、コロンビアジリス、ライチョウの仲間などが現れ始めた。

雷光形のトレールを登ると 10 頭ほどのマウンティンゴートの群れが草を食んでいた。そして、足元にはストロマトライト、およそ 6 億年前の海の化石、地球最古の生命体が転がっていた。このまま進んでグラニットピークチャレットで左折すると GSR のループに出るコースだが、ここで昼食を取りビッグホーンシープの見送りを受け、同じ道を引き返した。

3日目は車で 45 分後、アイス・バーグ・レークに向かう。どっか遠いところに来たという感じだったが、地図を広げると、昨日引き返したところの直ぐ北側で、大きく東の方から遠巻きしてメニー氷河案内所に着いた。文字通り沢山の氷河の跡、氷食谷の集まる場所で、アイス・バーグ湖まで 8 km の入口だった。最初の緩やかな登りを過ぎたところの、右手上方の草原斜面をゆっくりと進むクマの姿が見えた。どう見てもクマエリアに

人間が入り込んだ感じで、日本の人間エリアにクマが…とは反対の感覚だ。クマ撮影時間を含めて 90 分ほどで、パタミーガン滝で一休みする。この先は石ころの山路となったが、全体的にはなだらかな登り坂で歩き易い。木製の橋の懸かる小川を渡ると、美しい蒼色の水に氷を浮かべた湖が見えてきた。背後には衝立のようにほぼ垂直の岩山に囲まれ、懸垂氷河から崩れ落ちた氷塊が浮んでいた。ゆっくりと昼食を取り、往路を引き返した。

地図を見ると、公園中央部を横断する GSR の最高地点、ローガン・パス付近をほんのち



緑線がハイキングを楽しんだトレール

よっとうろうろしたに過ぎない。GSRの直ぐ南側、公園南東部 Two Medicine 付近、さらには国境を超え Waterton Lakes National Park とまだまだ日本では見ることのできないフィールドが広がっている。ここの公園にだけ焦点を絞って 10 日間、2 週間のツアーを組むのもありかな!!と思えた。

明日は、ロッキー山脈を東から西に越えて最終キャンプ地、アイダホ州コー・ダーリンである。

ツアー中の自炊と外食

<自炊>

テント泊の自炊となると少々身構えてしまうが、キャンピングカーでの料理となれば気が楽になる。この度のテント泊では、ツアーリーダー含めて 10 名で、食料、プロパンガス、炊事用具、テントなどの車両を引いての旅であった。

キャンプ地に入る前、ツアーリーダーの指示のもと皆で食料買い出しをし、これを朝食、昼食、夕食毎にボックスに分けた。食器類と炊事用具も 1 つのボックスに整理されており、ナイフ、フォーク、スプーンのナイフとは別に刃の部分がギザギザした肉専用のナイフが揃っていた。キッチンナイフ、包丁は 3 本用意されていたが、刃に指を当ててみると金属板の感じで、俎板は 2 枚で薄いプラスチックだった。食事当番は決めなかったが、朝も夜も 3 ~4 人で炊事を始めると、残りの人は後片づけに回った。

メニューは良く考えられていた。朝はお湯を用意し、好みによってコーヒー、紅茶、緑茶から始まる。パンはベーグル、全粒粉の食パン、クロワッサンなど、木の实入りなどのシリ



ビーフステーキ

アルは 2 種類、野菜はサラダ菜、キュウリとトマト、果物もイチゴ、ブルーベリー、モモ、リンゴ、バナナと、いつも複数種類が用意されていた。他にマヨネーズ、ピーナッツペースト、アボガドソースやマスタード、チーズにハム、ミルクとジュースと至れり尽くせりで、自分好みに応じて選択できた。

行動食の昼食は、朝食後に各自がパン、トルティーヤをベースに、好みのものをのせてアルミ箔で包み、ジップロックに入れて携行し

た。

夕食は 25 cm を越す肉の塊 2 つのステーキ、豚ヒレ 3 本、ジャンボソーセージなどをガスオープンでじっくりと焼いた。どれもビニールの袋の中で下味が付ており、焼くだけだった。これを自分の胃袋に合った厚さに切り、茹

でたり、焼いたりしたトウモロコシ 1 本が添えられた

「今日の夕食はカレーにライスだ。作って見ないか？」の声に二つ返事で引き受けた。ところが、用意された食材は、タマネギ 2 個、豆腐 2 丁、缶詰大小各 2 個計 4 個、穴の開いたビニール袋に入った米 2 袋、オリーブオイルと香辛料の数々だった。頭に思い描いたカレーとは結び付かないものばかりで、完全にお手上げだった。

笑いの渦の中、アイルランドと日本の合作カレーづくりが始まった。手始めが、タマネギの微塵切りと豆腐を大きめの賽の目に切りが同時進行である。豆腐をオリーブオイルで炒めて水分を飛ばし、炒めたタマネギと一緒にした。これを再度炒めてから小さめの缶詰の豆を加えた。最後に大きな缶詰のカレールーを加え、加熱しながら味を調べて「ベジタリアンカレー」の完成だった。

添えものは、さやいんげん（ビーンズと呼んでいた）の胡麻風味の照り焼きソース味の炒めものだった。パック詰めやさやいんげんを取り出し、両端を折ってさやの糸取り始めたら、包丁でチョンチョンと切り始めた。茹でてから照り焼きソースを絡めようとしたら、オリーブオイルで炒めて、胡麻を加えてソースで味をつけるのだという。出来合いは生に近く、サラダ感覚であった。一方、ライスの方は、米ではなくアルファ米で、熱湯に 15 分度浸した後、ボールに出すだけだった。

夕食で 2 度スパゲティを食べた。茹で方は日本人と同じだったので省略する。ソースは缶詰の完成品と思っていたら、タマネギの微塵切りから始まった。オリーブオイルでじっくり炒め、缶詰のスライスマッシュルームを加えて炒めた後、大量のひき肉を加え入念に火を通した。これにトマトの缶詰をどばっと加え、味を調えた。出来栄はトマト味ひき肉で、スパゲティを上回る量を添えて食べた。

<外食>

ソルトレークシティでのミーティング後の食事会、ジャックソンでのオプションツアーでのチャックワゴンディナー、イエローストーン 4 目の夜のピザディナーそれにキャンプ最終日、コー・ダーリンで夕食会と翌朝、ツアー最終日の朝食とメンバー揃っての食事会があった。



フタヒレ



● 夕食のピザは、我われ10名に、野生動物ガイドが加わった。5種類のピザ(five pizzas)をオーダーした。日本のスモール、ミディアム、ラージとは無縁の大きさで、直径30cmを優に越す超ビッグサイズであった。生地の高さもさることながら、チーズをはじトッピングの厚さが半端でない。これを6等分にして運ばれてきたが、2片(two pieces of pizza)を食べれば満腹になる大きさだった。それに注文した飲み物は超大型カップで、飲み干せる量ではなかった。結局、まるまる1枚分の6片(six pieces)を持ち帰りとなった。

● グランド・テトン国立公園の入口、ジャックソンでチャクワゴンディナーショーに向いた。Chuckwagonとは炊事用幌馬車だが、chuck そのものが食物の意味を持つという。ジャックソンの外れの森の中にあった。出迎えてくれたのがジーンズ、カウボーイハット姿の若者であった。建物は木造のバラック建て、テラスの下ではダッチオープン、西部開拓時代の鉄鍋で焼く、蒸す、炒める、煮るなど多用途に使用できる鉄鍋で料理が始まっていた。勿論、料理人もカウボーイ姿であった。客が列をつくりはじめた。アルミの大皿とカップは手荒く扱われた結果の凹凸ができていた。開拓時代のスタイルでのサーブもどっか粗野で乱暴だがこれも売り物の感があった。大きな蒸し焼きジャガイモ、続いて豆の煮もの、注文に応じてバーベキュー、ステーキ、シチューなどなどをドバっと装ってくれた。最後に



バイソン ミート

アップルソースであった。これにパンとパンケーキは好みに応じて取ると大皿からはみ出てしまった。大皿山盛りのご馳走を完食する人は何人も居ないと思われた。使い古されたアルミのカップでの飲み物はコーヒー、紅茶にレモネードでお代わり自由だった。

カウボーイの食文化の後には、カウボーイ姿の歌手がギターを抱えて現れカントリーとウエスタンミュージックが始まった。

アメリカの食事の量は半端でない。優に2食分、2人分である。最も量の少ないサラダでも食べ切れない。70代半ば過ぎからの旅で、体調管理上気を付けていることは食べ過ぎである。しかし、気が付いた時は手遅れだから可なり難しい。それにしても、今回のみんなの食事量が凄い。特に肥満体の40代の男女2名の胃袋の大きさは驚きだった。大

食漢の中に居るとついつい周囲に惑わされるので、これまで以上に気を配った。

農家で育ったので食料不足の記憶はないが、昭和13年生まれは「サツマイモゼネレーション」の別名があるほど食糧不足の中で育った。加えて、高校からの山岳部で食べ残しは考えられない環境で過ごしてきた。しかし、アメリカの外出は体の沁み込んだ習慣をも簡単に変えてしまう程の量である。料理の脇に添えられてくるフライドポテトの量は、食べ残しを前提にしているように思えてならない。

ツアー最終日の朝食は、ベーコン、卵2個のスクランブルエッグとカットされたフルーツのセットメニューで、残すことなく腹に収まったが、あらためて日本食の素晴らしさを意識してしまった。安い、早いを売りにしているY家の朝定食でも1汁3菜という和食の基本がきちんと守られている。和食がユネスコ無形文化遺産に登録されるなど世界で注目されている所以だろう。

余談になるが、日本の首相が和食の素晴らしさを映像で伝えていたが、箸の持ち方が覚束なく、タブーの一つである「込み箸」で食べている。箸の美しい所作も含めて世界に誇る文化として文化遺産登録だと思うのだが。それにしても、指摘してくれる側近が居ないのか、今も恥ずかしい映像がパソコンで流れている。